

法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科 教授 石島 隆

私は、20年余り監査法人において公認会計士として、会計監査、システム監査、システム導入コンサルティング等に従事しておりましたが、2003年4月に大阪成蹊大学現代経営情報学部（現マネジメント学部）助教授に就任すると同時に大阪市立大学大学院創造都市研究科修士課程都市ビジネス専攻システムソリューション研究分野（社会人大学院）に入学し、また、これと並行して2003年から2006年まで当協会の副会長・近畿支部長を務めさせていただきました。その後2005年4月に同じ大学院の博士後期課程創造都市専攻事業創造研究領域に進学し、2007年には法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授に就任し、社会人大学院生とともに研究を進めて参りました。

大学院で学生のさまざまなビジネスや調査研究のテーマに対応していくためには、学生相互間の交流を促進するとともに、教員自らの知識、経験のみでなく、学生にその分野の第一線で活躍している実務家との意見交換によって刺激を与え、さらに革新的なプランに導いていく必要があります。これまでに築いてきた実務家の人脈を生かして、学生に第一線の実務家を紹介し、ヒアリングする機会を積極的に作ることで、ビジネスプランや調査研究を促進しています。

現在、大学院で担当している授業科目は、「内部統制と内部監査」、「システム監査とITガバナンス」、「会計入門」、「財務会計論」の4科目です。このうち、「内部統制と内部監査」及び「システム監査とITガバナンス」については、企業の業務プロセスとITの利活用の問題点を理解させた上で、経営管理を改善するための組織、プロセス、人材等の側面での対応策を作成する方法論を学ばせたいと考えており、そのために、企業における内部統制の欠陥事例や内部監査の先進事例を取り上げて、討議により理解を深める形式で実施しています。

「会計入門」及び「財務会計論」については、会計の基礎理論を理解させた上で、企業が公表している財務諸表を中心にして、有価証券報告書、四半期報告書、適時開示情報等を用いて、企業の財務内容を判断する手法を教えています。論理的な手順に基づいて財務諸表を分析し、非財務情報と組み合わせることで、企業の収益性、安全性、成長性、生産性等の判断に有用な情報を得ることができます。

私は、これらの担当科目を通じて、企業における重要な業務プロセスとその基礎となる会計と経営管理の仕組みを理解させ、学生が将来、企業組織に属したり、コンサルタ

ントとして企業を指導するに当たって有用なアプローチを体得させたいと考えています。

また、私は、企業の内部統制の有効性向上とそのためのITの活用をテーマとして研究を進めてきました。博士学位論文では、財務報告の信頼性確保を目的とした内部統制を有効に機能させるための組織の実行能力を「内部統制ケイパビリティ」と名付けて、内部統制の欠陥事例と先進事例の分析に基づいて、その構成要素を洗い出し、その改善のためのITの活用や成熟度モデルの考え方を提示しました。

今後、このテーマを発展させ、財務報告の信頼性確保のみならず、企業に正当な業績をもたらすための経営管理のあり方とそのためのITの活用について研究していきたいと考えています。具体的には、コーポレートガバナンス、リスクマネジメント、コンプライアンスマネジメント、パフォーマンスマネジメントを統合化されたガバナンスとマネジメントの仕組みとして構築するための方法論とこれらの推進のためのITの活用を研究することにより、規制的な印象が強い内部統制というテーマを超えて、利害関係者間のバランスをとり、正当な業績をもたらすための企業における経営管理のあり方へと発展させていきたいと思っています。

ITの活用については、これまで、ERPパッケージソフトウェアの機能やコンピュータ利用監査技法について研究してきましたが、今後、統合化されたガバナンスとマネジメントを実現するためのITの構成と機能について、研究を進めていきたいと考えています。このテーマについて研究するためには、積極的にビジネス界の状況を把握する必要があり、今後もコンサルタントとの共同プロジェクトへの参画、企業の実務家へのヒアリング調査、企業の非常勤監査役としての活動、実務家を中心とする研究会への参加を継続し、実務の第一線からの新たな知見を取り入れていきたいと思っています。

以上のような道筋を辿ることができたのは、システム監査との出会いがきっかけになっています。システム監査との出会いは、情報技術そのものよりも、組織や業務プロセスに対する関心を引き起こしてくれました。さらに、その上位にはガバナンスの観点があり、今後も実務との接点を持ちながら研究を進めていきたいと考えています。

以 上